
勇気と絶望を胸にS.T.T.S.

恐助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇気と絶望を胸にS・T・T・S・

【Nコード】

N6521F

【作者名】

恐助

【あらすじ】

義兄弟の進斗、有花とともに暮らす孤児の少年、柏。彼の唯一の楽しみは人型の産業機械、「ヴァレット」の整備と建造。ようやく一機作り上げた彼のもとに早速試運転の機会が訪れるが…。

s l a s h 1 ・ フォールド (前書き)

至高の厨二病SF、連載開始です。

つまんなくなりそうですが、よろしく願います。

slash 1・フールド

僕はぼんやりと空を眺めていた。

そんなことをしているうちに時間はただ永遠に流れていく

…本来はその筈だった。

「おい」

「ん…あ、え…？」

僕は突如傾いた景色に反応する前に体を地面に叩きつけた。

「おい？大丈夫か」

“彼女”は僕に駆け寄ってきた。

利発そうな眼が僕を見て適当に刈った髪が揺れている。

「痛…驚いただろ。突然声かけるなよ」

「そんなのどうでもいいからちよつとは機体の修理手伝ってくれ」
ギャレット

「あれなら俺じゃなくてもできるだろ。俺はもう一体の方で疲れているんだ。」

単純なことなら進斗しんとに頼めばいいだろ」

「あいつは今忙しいから、何言ってもダメなのはお前も知ってる？」

「分かった分かった。今行く」

僕は立ち上がった。…背中が結構痛い。

ふと向こうの町を見てみるとあちこちの建物は崩れ、焼け焦げ…
要するに荒れている。

落ち着いて見ると実に愚かに見える。

まあそれで僕らも一応儲かってるんだが。

僕は彼女の後を追って整備場の扉の前に立った。

扉を開け、冷たい床の上に足を踏み入れる。

中には巨大な機械の塊——

十数メートルの人型の機体が窓から差し込む光の中で膝を立てている。

「これなんだけどさあ、なかなか外せないから外してくれね？」

彼女は周りの覆いが開いた太ももの中の大きな装置を指差した。

「周りを外して引っ張っても引っ張っても抜けないから」

僕は近づいてよく見てみた。適当に数個の部品が取り外されている。

機体の足元に転がっている部品を拾う。手に冷たさが伝わってくる。

「まったく…なんでこれまで外すかなあ」

「それ外さないところが取れないだろ」

彼女は見当違いな部分を細い指でつついた。

「…もういいから、僕に任せてくれよ、有花^{ありがた}さん」

そう言っ僕が手袋をはめると彼女は『だからオレをそう呼ぶなと――』

だのと喚いて出て行った。

ここからはもう僕だけの世界だ。これをさっさと終わらせよう。

そうすればあれに取り掛かれる。

オレは廊下の奥にある陰気なドアを叩いた。

「入ってる」

「トイレじゃないんだから」

オレはドアを開けた。

中の椅子に座っている坊主頭の少年がキーボードを叩いている。

こちらを一瞥するとまた仕事に戻っていく。

「おい、進斗。仕事は順調か？あとどのぐらいで終わる？早くもう一機欲しいんだ」

「どんぐらいだろ？知らないね。これ難しいから」

彼は全くこちらを振り向かずに答えた。

「んー、じゃあできたら整備場に持ってといてくれよ。いつでもあれには

あいつが付いてると思うから」

「ああ、分かった」

オレはその部屋を出て、今度は廊下を戻って右の部屋に入った。
机の上に待機状態のパソコンが置かれている。

オレは腕を――寒いのでまくったつもりになって今月の予算をつけ始めた。

偶然目に止まった窓の外は久しぶりに青空が広がっている。

(久しぶりに見たな…)

感傷的になっている暇は無い、と思つてキーボードに指を乗せた。

気がつけば窓の外は暗くなり、久しぶりに月を見ることができた。
今夜の月は半月で、もう半分を見ることができなかった。別に気にしないけど。

俺はディスクを持つて鉄の扉を開いた。

中には二体の機体ヴァレットが鎮座している。

片方は形状からして恐らく運送屋の機体だろう。整備されたばかりで傷一つない。

もう片方は

機体に一人の少年が登つてあちこち手で触っている。彼は柏かしわ。

俺達と仕事をする言わば同僚だ。長髪で、顔つきは端正である。

後ろ髪はひつつめにし、前髪は目にかからないように左側をピンで止めている。

止める位なら切ればいいのに…。

「これ、出来たよ。それにすぐ入れられるようにしてあるから」

俺は彼にディスクを渡した。彼は笑みを浮かべる。

「よし、ありがとう」

「しかしなーんでまたそんなに嬉しそうなんだ？」

「決まってるだろ。終わったからさ。これでようやく機体が動かせる」

彼はおもちゃを買ってもらった子供が部屋に駆け込むように操縦席に滑り込んだ。

「そんなに『ヴァレット』を作るのは楽しいのか…？」

ヴァレット…アルファベットで表記するとV・A・R・E・T。
Variable Amateur's Riding Equipmentの略で、

汎用性の高い素人でも容易に扱える搭乗型の科学技術装備というのが大体の意味だ。

基本人型で神経接続によって自在に操作できる、全長十数メートル程度の機体…

簡単かつ一般的で大雑把な言い方をすればロボットだ。

僕は操縦席のドライブにディスクをセットした。ディスクを読み取る音がした。

機体のシステムを起動する。もつとも、今から肝心な部分は入れるんだが。

自動でOSは機体にインストールされた。本来なら面倒な作業が必要なのだが、

進斗と一緒に作っておいてくれたプログラムのお陰でそれは省くことができた。

画面を操作してコックピットのハッチを閉める。

隙間風が入らなくなり、コックピットの中が若干熱くなる。

神経接続を開始…完了。

動きを頭の中に思い描く。

がしん、とコックピットに揺れが伝わる。

敢えて衝撃吸収システムはオフにしてある。

だから機体が足を踏み出したのを感じることができる。

そのまま整備場を一周する。もともと自信はあったのだが、機体の足が良好であることが確かめられた。

次に腕を何度か曲げ伸ばししてみる。右腕が多少動かしにくい……
まあ、後で直せばいいか。そう思って僕はハッチを開けた。

下を見ると見慣れた少女が扉の近くに寄り掛かっている。

「晩飯できたからその位にして降りて来いよ」

「ああ、分かったよ。あ…リョウ」

「お前またその名前で…」

僕は唇を緩ませながらヴァレットを降りた。

コックピットの中はさっきより熱くなっていた。

翌朝、僕は目覚まし時計の耳障りな音で目を覚ました。

カーテンは閉めっぱなしにしていたので朝日が差し込むことはない。

部屋を出て、廊下を歩く。傷んだ床が足を乗せる度軋んで音を出す。

毎度毎度うるさいな…と音に苛立ちながら居間に入る。中には二人が既にいた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「ああ、悪いけど今日仕事入ったから」

いつものように平然とリョウは言った。

「なんで？」

「昨日の夜匿名で電話よこして来られてさあ。輸送だってよ」

眠そうな目を擦りながら進斗が答える。

「というわけで出発は1時だから。よろしく」

「なんてこった…今日は…」

休み、と言いかけたところで僕は思いとどまった。

まあいいか。機体も完成したし、試運転には丁度いい。

一人の男の子が歩道を走り、何かに躓いて転ぶ。

それを後から追ってきた母親と思いき女が抱え起こす。

全く、親に甘えられる子供というのは…気楽なものだ。

僕は嫉妬はその位にして機体を歩かせる。コックピットの中は

昨日よりもさらに熱い。なにしろリョウの希望で複座式にしたのだ。

「おお、やっぱリョウウォールナット」より速いな」

ウォールナットは前に僕達が同業者から格安で買った機体だ。ウォールナット

一昔前の機体で、新しいのを買ったので必要なくなったらしい。

僕達はそれに改造を加えて使っている。ちなみに“ウォールナット”は

英語でクルミを意味するらしく、丸っこい胸の部分から両腕と頭と腹が

生えているような外見をしている。今は後ろで進斗が操縦している。信号機が赤になつので立ち止まる。モニター越しに見える町の景觀は

決して綺麗とは言えない。

右側のビルは所々に亀裂が走り、窓ガラスは割れた所をまるで昔の漫画のようにテープでいびつに止めている。

左側のビルは所々がすすけ、更に弾痕まである。

それでも、見慣れたいつも通りの町だった。

ドウッ

そう思ったとき、爆音がした。近くの地面に大穴が開いている。

これは…まさか、と思ったときにはもう遅い。

頭を揺さぶるような音が上と下で響いて機体が大きく揺れた。

「…っ」

「なんだ!？」

機体のモニターが消えている。

僕は嫌な予感を抱きながら緊急レバーで機体のハッチを開いた。

機体の下に降りてその光景を見た僕はもう泣かんばかりだった。

つい昨日、2ヶ月かけて作ったばかりの機体は首と頭の一部が弾丸で吹き飛ばされ、

腹から腰に掛けての部分が大砲で見事にえぐられていた。

「…」

この感情は、そうだ、たとえるなら15年間手塩にかけて育てた愛娘を

目の前で凶悪な巨漢に滅多刺しにされて無残に殺害されたようなも

のだった。

実際、半年も建造にかかっていないし、パーツも高かったが所詮中古や

廃材が多かったのだ。が、期待の損傷は酷いのは確かだ。

吹き飛んだ頭の中には進斗一緒に苦勞の末に

ようやく組み上げたメインコンピューターが、

えぐられた右の腹部には一番高かった動力炉の一部と、駆動系の制御システムとかが収まっていた。

「ああ…なんてこった。ひでえな」

僕は呑気なリヨウの言葉に耳を傾けず、騒々しい青空を睨んだ。

そこには飛び回る二体のヴァレット…自衛隊で採用している最新モデルだ。

恐らくどこぞのチンピラが盗んだんだろう。片方はライフル状の大砲を抱えている。

僕は歯ぎしりした。

そしてそれに砲撃する純白の機体。

何だろうか、あれその物は今までどんな雑誌でも見たことがない。

外見は色を除けば自衛隊の最新型によく似ている。

僕はそのヴァレットに自分の心配も忘れて見入ってしまった。しかし、その直後にそのヴァレットは目と鼻の先に無様に、落ちた。

そう、僕の目の前に。

slash1・フォールド（後書き）

中途半端ですいません。 slash2に話は続きます。

s l a s h 2・切断と接合を（前書き）

かなり遅くなりましたが第二話です。今回は前回より大分長くなっていますですが書き方を少し改善しました。
よろしく願います。

slash 2・切断と接合を

その機体は、美しかった。

手や関節部分、腹等の灰色を除いたその他の部分は純白で、形状は曲線と直線の優雅な組み合わせによってスマートに整えられている。

腕は曲線を描いて膨らみ、爪先から足の裏にかけてスリットが入っている。

背中には飛行装置と思われる箱形の物体を背負っている。

正直、惚れ惚れするほど格好いい機体だ。

まあ、頭から道路に突っ込んで仰向けになり、大の字になって倒れているその無様な状態を除けば、だが…。

「何やってる！」

機体のハッチ開閉レバーを探しているリヨウに呼ばれて僕は我に帰った。

「リヨウ！」

「待て、あつた！」

腕を伸ばしたリヨウが体を反らすと機体の外装がスライドして…これがまた格好いい。コックピットが開いた。なにやらリヨウが中を見て驚いているようだ。

僕は駆け足で機体に登る。上空では二体のヴァレットがまた何かと戦っている。多分民間のヴァレットだ。

だが今はそんなことを気にしている暇はない。

「どうした？」

「柏、手伝え。早くこの…よつと…」

僕とリヨウが機体のコックピットから引きずり出したのは――

――しきりにせき込む白髪の老人だった。

その老人のしわは深く、顔中に刻まれていたが、

引きずり出したリヨウと僕に、咳き込みながら抵抗する姿は
何処か生命力に満ち溢れているようにも見える。

「なにを…わしは…ごほっ…ん…はなせ、あ…ごほっ…」

老人は何かを言おうとしているが咳のせいで全く文章にならない。

「柏、進斗を呼んでこの爺さんを早く安全な所に連れてかないと…」

「わかった。そっちを…」

リヨウは老人に肩を貸そうとした僕を突き飛ばした。

「お前は乗るんだ！」

その拍子に僕は中の操縦席に落ちてしまった。

「リヨウっ！何——」

ハッチが閉まって目の前が真っ暗になる。機体のハッチ開閉レバ
ーを操作されたい。

畜生…信頼してるのか押しつけてるのか全然分からん…。

「ジジイ！いい加減にしろ！」

あまりに激しく暴れるので羽交い絞めにして怒鳴りつけてやった。
爺さんはふとこちらを振り向くとたんに大人しくなった。

咳き込みながら顔を上げて、

オレと目を合わせた爺さんの顔が心なしか嬉しそうに見えたのは…

…気のせいかな。まあそれよりも…！

「柏！聞こえるか？こいつでオレとジジイを持って進斗に渡せ！」

オレは機体の頭に向かって大声で叫んだ。

『はあ！？』

外部スピーカーから間抜けな声が返ってくる。

「いいからとっとと持ってけ！お前が一番上手いだろうが！」

そう言ったとたんにオレ達は下から何かにすくい上げられた。白
い機体はそのまま立ち上がる。

『しっかりつかまってる！』

機体の指に右手でしっかりとしがみつき、片手で爺さんを抑える。
ヴァレットの指は物を掴みやすいように滑り止めのような素材で

きている。

『進斗！二人を安全な所に！』

一語一語をしっかりと伝えるように柏が進斗に叫ぶ。

『よし。今から行く』

進斗操るウォールナットが後ろから近づいてきた。差し出された機体の手に、

まだ苦しそうな爺さんを支えながら降りる。

『よし、早く逃げるぞ！』

そう言つとリヨウが振り向いた。

「お前はまだすることがあるだろ！」

オレは白いヴァレットを仰ぎ見る。

また大声出させやがって…男の癖に…。

「ああ…なんでこんなことに…」

リヨウは戦えと言いたいのだろう。だからわざわざ中に叩き落としたのだろう。

それにしても戦いを前にして思わず口に出た第一声がこれとは、情けない。

とは言つても今更退くことは出来ない。今ここで逃げるようなことをしたらこれから散々罵られて

生活する羽目になりかねない。リヨウのことだから「負け犬」とか仇名をつけて、それで一生僕を呼びかねない。

進斗は「友達が俺を置いて逃げたんだが…」とか書き込んでネットの掲示板に事の全てを暴露。それで

全世界のネットサーファーの注目を集めかねない。

まあ愛する我が子の仇打ちだと思えばいい。

急いで忘れていた機体のチェックをする。…異常はない。察するにあの老人の発作で落ちたんだろう。

飛行システムを起動。飛ぶのは久しぶりなので緊張する。

モニターに移る外の風景が下に動いた。機体はしっかり離陸した

ようだ。外を見渡すと敵のヴァレットが見える。

さっきのチェックで分かったがこの機体には両腕に武装が予め内蔵されているらしい。

試しに右腕に収納されている小型砲を起動し、構える。…相手はまだ気づいていない。一体の脇腹に照準し、

発砲。全く当たらない。流石にそうそう当たるもんじゃないか…。

気付いた敵が向かってくる。左腕のエネルギーエッジを起動し、応戦。相手の装甲を二、三度斬ったが、恐らく敵機は軍用機だ。装甲も防御力に優れた高密度セラミカル合金製だ。

余分なことを考えていると相手は隙に付け込んでハンドガンに向けてくる。やばいっ———と思った時には横にかわしていた。この機体はなかなかの代物らしい。

距離を取らないとまずいと思い、牽制射撃をしながらブレードバーニアを起動、足を開いた機体が足のスリットからスケート靴の刃のように可視エネルギーを放出し、機体が加速する。予想以上の速さだ。相手に突っ込む前に左に軌道をそらす。

「わっ…わわわ…」

いくらなんでも速過ぎだ。ブレードバーニアで飛ぶのは、これも久々のせいかもしれない。制御ができない。おまけに吐きそうだ。

そんな状態で敵が迫ってきた。このままだと激突する！

ザシュッ

鋭い音が耳を裂く。

とっさに上に避けようとしたら脚部のブレードバーニアが相手の装甲を袈裟掛け状に切り裂いてしまったようだ。

とにかく敵の内部機器は損傷した。今がチャンスだと思い、一旦ブレードバーニアの出力を下げる。代わりに両腕のエネルギーエッジを起動。宙返りで体勢を立て直し、敵機の首に左右からエッジを挟むようにあてがい、切断。

人間で言えば脳と体を切り離された機体^{ヴァレット}が町に落下し、砂煙を巻き上げた。ざまあ見ろ。

大きく弧を描いて旋回し、もう一体の敵を見据える。さっきの民生機も手こずっているらしい。

敵の砲撃を回避。そのまま一度地上に降りてブレードバーニアを地上移動モードに変更。足を地面と紙一重のところで浮かせて地上を高速で進む。幸い人は脇に避けていてくれた。

そのまま我が子^{自作ヴァレット}に大穴を開けてくれた大型砲の砲撃を回避する。地面にいくつもの大穴が開いた。

先程から狙いは正確らしいがこの機体の移動能力には勝らない。

こちらへの攻撃で隙の出来た敵機に民生機が攻撃、胸に命中する。相手がよろけたその瞬間、機体を飛翔させた。高速でエネルギーエッジを向けて突進する。また吐きそうになるが堪える。

相手も簡単にやられるつもりはないようで、近接戦闘用の短剣を抜くがもう遅い。大きく振られた両腕のエネルギーエッジは敵の腹部を両断…とまではいかなかったが大きくえぐっていた。

腹部に納まっている動力炉やら制御システムがいかれると、全ての機能が駄目になることを身をもって教えてやった。

敵機はそのまま相方と同様に地面に墜落した。

ゆっくりと地上に降り、コックピットを開く。涼しい外気が気持ちいい。

みれば…
——冷静に考えて

…帰って壊れた部品を揃えて修理すれば時間かかるけどそれで済むよな？僕の自作ヴァレット。

「まさかあそこまでやれるとは…」
白い機体がこちらに向かってくるのをモニター越しに見ながら俺は呟いた。

後ろを見るとリョウも同様に驚いているらしかった。

「しかし強いな…あの機体。軍用っぽいのに真っ白で目立つから—

瞬ふざけてるのかと思いきや、見つかったら叩きのめせばそれで済むってことか…」

「ゲホッ…わし、の、ゲホッ…」

リヨウの隣の老人がさらに咳き込む。これは本当に辛いようだ。…心なしか微妙に嬉しそうに見えるのは…追及しない。

「おい進斗、早くしないとこの爺さん。まずそうだぞ」

「わーかってるって。それに自警団が来るとまたうるさいからな」

俺は機体に親指で後ろを指させて柏に指示を送る。これで十分伝わるだろう。

白い機体が頷いて飛び立った。あの早さなら追跡できまい。

俺は後ろを振り向く。

「ちよつと揺れるから爺さんをしっかり支えてくれ」

「よし、任せろ」

リヨウがはつきりと答えたのを聞いて、俺は機体で近くに転がっているヴァレットの残骸を拾い上げた。とりあえず細かい部品は後ろのコンテナに入れて、本体は横向きに担ぐ。積み荷が無事だといののだが。

「よし、行くぞ」

機体が駆動音をあげて走り出した。だいぶ無理をさせてはいるが機体自体は負荷に対してかなり丈夫なので問題はない。

「おい、少しスピード落とせよ。揺れ過ぎだ」

リヨウが後ろから口を挟む。

「しゃーないだろ。だからしっかり支えてくれよって言ったんだ」道路に足を踏み出すたびに機体がまたきしきしと音を立てる。この調子で行けば後20分位着くだろう。

白い機体が野原に降りる。また一瞬吐きそうになったがなんとか吐かずに済んだ。

散々暴れておいて今更言えることではないがこれはあの老人からの借りもの…まあほとんど盗んだも

同然だけど…とにかく他人の機体を汚すわけにははいけないので必死に耐えた。

町の方角を見る。進斗のウォールナットにはブレードバーニアはおろか一般的な飛行装置など搭載されていない。申し訳程度に飛行が持続できない旧式のもものが積んであるだけだ。だから必然的に移動はほとんど徒歩になるので、この機体に比べるとかなり遅い。

ただ待っているのも暇なので機体の情報を確認してみる。手元のレバーとスイッチ類で機体情報を呼び出す。

まず目に入ったのは形式番号『SVL-000』…000ってことは試作型か何かだろうか。

次に機体番号『013』はどうでもいい。一番気になるのは名前だ名前。その下を見る。

『Eina:0/エイナ・ゼロ』これがこの機体ヴァレットの名前…『ゼロ』は分かるが『エイナ』の意味が分からない。後で英和辞典でも引いてみるか。

レーダーが一機のヴァレットをとらえているのを見て、僕は機体情報を閉じてモニターで外を見た。

ウォールナットが丘を登ってくるのを確認して、コックピットのハッチを開き、機体の外に出る。

『柏ー、大丈夫かー？』

こちらに歩いてくる外部スピーカーから進斗の横柄な声が聞こえてきた。

「ああ、大丈夫。それより荷物とお爺さんは？」

大きめの声で機体に告げると返答が返ってきた。

『爺さんはまだ咳してる。荷物は知らん』

『それより柏、早く中に』

リヨウの声を聞いて、僕は機体を降りた。そのまま走って整備上のドアを開け、中に入る。

ドアの近くにある少し錆びたレバーを下ろすとシャッターが開き、ウォールナットが中に入ってきた。

コックピットが開くとまず進斗が出てきて、次にリヨウが顔を見せ、最後に老人がリヨウに抱えられながら現れた。

「柏！手伝え。この爺さんを連れてくぞ」

「ん、ああ、分かった」

本当はあまり気が進まなかったのだがこの状況では仕方がないと思い、リヨウとともに老人に肩を貸した。

老人が水、水、というのでコップに水を入れて差し出すと、老人は胸のポケットから錠剤を取り出して飲み、少しすると落ち着いたようだった。

話を聞くと、老人は自衛隊のパイロットらしく、「島原靖也^{しまはらせいじや}一等空佐」と名乗った。

「にしても爺さん、こんなところにあんな機体で何しに来たんだ？」
進斗がいつもの口調で尋ねると、島原さんがしゃがれた答えた。

「自衛隊の天候実験による影響がどうたら極秘調査任務でな。小生意気な若造どもがヴァレットを盗んで暴れようとしておったからな。灸をすえてやろうと思ったら喘息の発作が出てしまった。そこで君らに助けられたわけだ。全く、恥ずかしい話だ。ハハハ」

「…えーと、『極秘』ってことは僕たちに話すのはまずいんじゃない？」
僕が口を閉じると沈黙が走った。数秒経って島原さんがそれを破った。

「な、何を言つとる。わしはそんなコソコソしたことをするのは無粋だと思ったから正直に話しただけじゃ」

焦ってる様子を見るとどう考えてもつい口が滑っちゃったみたいなんですが…。

それはさておき、

「ところであの機体ってなんなんですか？えーと…エイナ・ゼロっていう——」

言いかけたところで持ち主の島原老人が口をはさんだ。

「なにを言つとる。あれはそんな軟弱な名前じゃないわい。命名」

大和『じゃ!』

「大和つて…戦艦かよ…」

後ろを見るとリヨウが壁に寄り掛かって呆れていた。僕は再び島原さんに向き直る。

「“カワイイ”顔して無粋なことを言うのお…あんな旧式なんぞあれ単機で海の藻屑に出来るというのに…」

とりあえずそれはそういう問題じゃないとして、島原老人は最大の禁則事項に図らずも触れてしまった。

「……………」

恐る恐る後ろを進斗と振り返ってみると、リヨウが顔をひきつけている、が、なんとか耐えているらしい。もともと彼女は自分の性別について言及されると大抵は一回目でキレるので今回の我慢は上出来だろう。相手が初対面の老人だからだろうか。しかし、このままだと限界に達しかねないので、話題を変えかねなかった。

「え、ああ、ところで島原さん——」

「島原一等空佐だ」

「…一等空佐、で、その『大和』は何処で？」

「ああ、前に新型機の仕様がどうたらを手伝うために研究所に行ったことがあつてな。そこで気に入ったから一機譲ってもらったんじや」

「…で、爺さん。なんであんなところで暴れてたんだ？」

進斗が関わることになったそもその原因を尋ねた。

「爺さんじゃないわ。一等空佐じゃ。まあそれはともかく、あの時の話じゃったな。とりあえず宿を探そうと思つとつた時に若造どもが軍用の機体で強盗をやらかしおつてな。灸をすえてやろうと思つて『大和』で突っ込んだんじゃが途中で喘息の発作が出て、そこを君らに助けられたわけだ。全く恥ずかしい話だよ」

そう言つと島原さんはおかしそうに口元を歪める。

「爺さん、薬があつたんじゃないのか？」

「飲むのを忘れとつた」

「……」

「全く……とんでもないボケ老人を助けちゃったなあ……」

リヨウが口を挟んだ。すると島原さんが明らかに不満そうな顔を
して一言。

「ひどいのう……“女の子”ならもつと“おしとやか”に老人をいた
わるもんじゃ——」

限界突破。

僕と進斗は肌でリヨウの状態を感じ取ると同時に席を立ち、すば
やく彼女に組みついた。

「お、落ち着け！相手はお年寄りだ。一般的に社会に浸透している
福祉の基本概念にの則ってだな……」

「うるせえ、もう我慢ならん！このクソジジイが。そんなにオレを
怒らせたいか！」

「安心しろつて。誰かを怒らせたがる奴なんて世界に2割いるかど
うかだから」

怒りを爆発させたりリヨウを抑えるのに必死の僕らを放っておいて
元凶の島原さんは呑気に傍観していた。そう、「元凶」が……。

すると電子音が何処かで鳴った。島原さんの携帯電話らしい。携
帯電話を取り出してボタンを押して誰かと島原さんは通話を始めた。
つくづく呑気だ。

が、しかし、会話を進めるうちにしっかりと引き締まっていた島
原さんの顔が曇っていき、返事も相槌ばかりになり、最後にはすっ
かり生気の抜けた間抜けな顔になった。

島原さんの様子がおかしいのを見て抵抗をやめたりリヨウを放し、
椅子に座ったまま放心状態の島原さんに進斗が三度目の質問をする。
「爺さん、何があつた」

島原氏はゼンマイで動くおもちゃのようにぎこちなく進斗の方を
見た。

「クビになった」

本日午後2時47分、島原靖也氏は日本自衛隊一等空佐から一般人に大幅に降格した。

ちなみにその理由は独断による戦闘と高齢による障害である。

「つて要するにそれって計画的な厄介払いじゃないですか」

夕食の席で島原さんの話を聞いた僕の第一声である。

なにしろ島原さんは少しでも態度の悪い若い士官がいれば何処だろうと殴りかかり、酷い時には飲食店の前で地べたに座っていた若者4人（まあそれはそれで悪いのだが）に食ってかかり、結局は全員のしてしまったらしい。

それに妥協や手加減を知らないのかヴァレットによる実践訓練において相手を徹底的に痛めつけ、搭乗者は軽傷で済んだものの乗っていた機体を見事に大破させるといふ暴挙を本人曰く2、3度繰り返し、その上若い女性士官や事務官にセクハラをし放題というのだから仕方がない。

それでも今まで解雇されなかったということは、この人の能力を自衛隊の連中はそんなに必要としていたのだろうか？

「なんでじゃ？」

「こんなところに派遣してそこでクビにする…なんと周到かつ合理的な手段なんだ…」

「感心してる場合か」

進斗とリヨウの間抜けなやり取りはどうでもいいとして、

「それであの機体はどうするんですか」

もちろん、『エイナ・ゼロ』のことである。

「ああ、『大和』ならわしの個人所有扱いになつとるから今更返さなくてもいいんじゃない。それにあの機体は連中もいらんみたいだしな」
そこでパンをつまみながらリヨウが島原さんに不機嫌な声で言った。

「で、爺さん。あんたはどうするつもりなんだ？」

「すまんがしばらくここに置いてくれ」

さらっと言われても困るんですが…

「とは言ってもなあ。俺ら自分たちを食わせるので精一杯だしなあ…」

以外と現実主義者の進斗が遠回りに拒否した。

「わしがいれば年金が毎月入るがそれでも嫌か？」

『はい？』

三人で異口同音に言った。

「え？年金貰えるのって65歳からじゃなかったんですか？」

「安心せい。わしは67歳じゃ」

どこまでもとんでもない老人だ…いくらヴァレットの操縦に体力がそれほど関係しないとは言っても定年過ぎてもパイロットを続けるとは…。それよりどうして定年退職させられなかったのが気になるが…まあ大体予想は付く。

「きまりじゃな。まあ仕事は手伝う。子供に養われては面子が立たんからな。」

「まあそれなら別に…」

最後の最後までリヨウは判断を迷っているようだった。

「それなら別にいいよ。よろしくな爺さん」

進斗が朗らかな声でリヨウの代わりに言葉を続けた。

「まあ…いいか」

僕は同意した。もともと、僕はあの『エイナ・ゼロ』に興味の大半が向いていたのだが。

「多数決には従わざるを得ないか」

リヨウも渋々承諾したようだった。

そこで島原さんは笑顔を見せた。

「よし。よろしく頼んだぞ。ところで……ずっと気になっていたんじゃが、君達親はどうしたんじゃ？」

僕らは言葉に詰まった。

頭の中で、からまった記憶のひもがほどけて順々につながっていくように僕は感じた。

バラバラにしておけばいいものを。

slash3 プラッディ チャイルド（前書き）

更新が大幅に遅れて申し訳ありません。

前回より、もう少し見ていて面白くしようと努力しました。成功しているかどうかは微妙ですが。

slash3・ブラッディ チャイルド

僕らは一応人間である以上、必然的に親が存在することになる。が、物心ついたときには既にいなかった。要するに僕らは孤児……捨て子だ。

まあ、名前は本当の親がつけて、施設に預ける際に一緒に残して行ったものらしいし、なにより児童養護施設に預けられたのだから段ボール箱に入れられて橋の下に置かれるよりは大分ましな扱いと言えるだろう。

この地域は国の進めていた気象操作実験の対象区域として30年ほど前に選ばれ、当時は名誉ある扱いを受けたらしいが、実験はことごとく失敗。以後は異常気象のせいで一年中気温が低くなり、農業には向かず、人口も減った。国の経済状態が悪化してからは、政府は主要都市の保護に重点を置くようになり、ほとんどの地方都市は必要最低限かそれ以下の措置しか施されなくなり、衰退の一途をたどった。無論、この地域も例外ではなかったらしい。

治安も財政も悪化し、万人が満足に子供など育てられるはずがない。一人はまだどうにかなくても二人以上は……という家庭も多かったらしく、各地の施設は孤児であふれた。

僕も、そのうちの一人だったのだろう。ただ、親が誰で、どんな顔で、どんな心情で、なぜ僕を見捨てたのかは全く知らないのでもそれは憶測の域を出ないのだが。

泣き虫、わがまま、血の気が多い、と子供にも一応個性というものはあるが、集団でみるとどの子もあまり変わらないようにしか見えない。僕もそんな子供だった。

が、しかし、いた。子供の僕から見ても、明らかに集団の中にあっても他とは違うと断言できる強い個性の持ち主が。

一人は女の子だった。ぼさぼさの髪の下、厳しく結ばれた眉根と利発そうな眼が強く印象に残っている。

ある日、一人のいじめっこの男の子が他の子を泣かした。まあ、当時としてはいつも見かける光景だったのだが、彼女は行動した。泣かした方の男の子に握りこぶしで駆け寄り、数度やり取りを交わした後、唐突に掴みかかった。所詮相手は女だ、と男の子は侮っていたのか対応が遅れ、鼻先に拳を叩きこまれた。遠くから見ても彼女が激しく怒っているのが見て取れた。その後はやり放題で、馬乗りになって滅茶苦茶に顔やら腹やらを打ちのめし、相手が泣き出しても全くやめる気配がないので保母さんが止めに入ったが、振り向きざまに見事な右フックを保母さんの顔に命中させ、僕を含めた周囲の子供たちの間に戦慄を走らせた。

ちなみに問題のいじめっ子の方は全治一週間ほどの軽傷を負い、助けられたことになる泣かされた子は彼女に以降心酔して言い寄っていたが、本心を彼女に伝えるたびにはたき落とされていた。

そしてもう一人は男の子。短く刈り込んだ坊主頭とぼんやりした一重まぶたの目、とそれほど外見は印象的ではなかったのだが、雰囲気、と呼べばいいのか、得意なそれが漂っていたように思えた。

彼はいつも一人か、多くても三人で本を読んだりパズルやゲームに興じていた。そこに時折突っかかってくる奴がいるのだが、彼はいつも全く気にする素振りを見せなかった。ある時、突っかかってきた子に彼は襟首を掴まれた。しかし彼は抵抗せずになやりと口元を歪めて相手に侮るような視線を向ける。興奮した相手が手を挙げても彼はされるがままにし、最後に一言「気が済んだ？」と聞き返していたのを見たことがる。相手はそれで萎えて彼にちよっかいを出さなくなった。

要するに、彼は大人だった。下手な成人より大人かもしれない、そうあの頃の僕は思っていた。

二人とも、それほど有害な人間ではないのだが、気弱な僕はどうも関わる勇気がなかった。

女の子の方は前述の通り、「ボーイッシュ」「男勝り」の一言で片づけるにはいささか荒すぎたし、男の子の方は逆に陰気で、大人

びた雰囲気はどこか近寄りがたさを生み出していた。

それでは何故僕は彼等と同居しているのか。

僕らがいた施設には通称・「班分け」なる制度が設けられていた。それはその名の通り5、6歳あたりで施設に収容されている子供たちを3人一組の班に分けるというものだった。施設内ではこれできとめられ、引き取られる時にもこの班ごとにまとめて引き取られる。そうでもしないとなかなか施設から子供が減らず、増え続けてパンクしかねなかったのだろう。結局は僕らの居た施設は3年ほど前に潰れてしまったらしいのだが。

月日が流れ、気がつけば僕にも班分けの時が来ていた。

実質上人生の伴侶となるのだから今から考えるととても深刻な問題だったのだろうが、子供の僕はそこまで考えが及ばず、楽しみに発表を待っていた記憶がある。

僕はその“人生の伴侶”を知った時にとても驚いた。なにしろそれまでで最も僕の記憶に残り、かつ最も近寄りがたかった二人だったのだ。

（名前は？）

大きな瞳で僕を見据えて女の子が始めに聞いた。

（かしわ）

僕は

（へんな名前）

坊主頭をかしげて男の子が言った。

女の子は右手を差し出して笑顔を見せた。

（よろしく。オレはリヨウ）

（ありが、じゃないの？）

僕は頭をはたかれた。

（痛い…）

（その名前呼んだらこんどは蹴るからな）

残った男の子が最後に平然と名前を告げた。

（おれはしんと。まあ適当に呼んでよ）

二人との出会いは記憶に残るような劇的な出来事ではない、他愛もないものだったと思う。

二人と同じ班に分けられてからの日々は楽しい、というか騒々しに近かった。リヨウは事あるごとにかんしゃくを起こし、進斗はどうもリヨウと馬が合わないらしく、しばしば衝突していた。進斗の周りに対する一種の挑発的な態度も相まって二人は度々トラブルを引き起こし、僕も巻き込まれる形で物理的・精神的に多数の被害を受けたが、それも2、3週間もすれば慣れて、いつのまにか自分の生活の一部となっていた気がする。

が、そんな生活もある日あっさりと終わった。

僕達の引き取り手がついたのだ。

その話を聞いてから数日後、僕たちの元に一組の若い夫婦が訪ねてきた。夫は角ばった顎に無精髭を生やした、無口でやせ形の男性で、妻は夫と不釣り合いにも見えるほど美人で、髪を肩まで伸ばした穏やかな顔つきの女性。

それが僕らの実質上の親、神前夫妻^{かんだき}だった。だから僕の名前は「神前 柏」。進斗の名前は「神前進斗」。リヨウの名前は「神前有花」だ。

（大きな家）

（あなたたちの新しいお家よ）

（おばさん、あれが？）

小高い丘の中腹に、一組の夫婦と子供たちが立っている図が脳裏に浮かぶ。その目線の先には一軒家…と言うには不自然な、大きなガレージらしき建物が併設された木造住宅が建っている。

（お母さんって呼んでくれて構わないのよ？有花ちゃん…）

（おれのことばリヨウって呼べよ）

（それより早く行こうよ、お母さん）

真っ先に、神前婦人^{かんだき}もとい母さんを「お母さん」と呼んだのは、

以外にも進斗だ。何故なのかは分からないが、まあ所詮偶然なのだろう。

（ほら、彼もこう言っていることだし）

そう控え目に言う神崎氏、もとい父さんは今でも僕の記憶に強く残っている。

父さんと母さんは整備工として生計を立てていた。仕事を終えた父さんからはいつも油の臭いが漂い、母さんはその都度鼻をつまんで、

（あなた、もう一寸綺麗に作業着使えないの？）

（仕方ないじゃないか。汚れちゃうんだから）

という会話を交わしていた。

当時僕はまだ幼い子供だったが車や飛行機、列車などには全くと言っていいほど興味がなく、テレビ画面に映る、砂ぼこりに浮かぶ巨大な人影。ずっしりとした柱のような足を踏み出す鉄の塊。空に舞い上がって彼方に飛び去る巨人。それらに僕は魅せられた。

要するに子供の頃からヴァレットが好きだった。

だから父さんの仕事は僕にとっては見てるだけで時間を充実させるもので、僕は暇さえあればヴァレットの膝元にかがむ父さんの姿を見ていた。

ある日、僕が整備場の扉を開くと、父さんは振り返って自嘲気味に言った。

（見ててそんなに楽しいか？）

僕はうなずいた。

（それなら教えてやろうか）

その日から二人でヴァレットの前にかがむようになった。

ちなみにこの頃、同時に父さんにヴァレットの操縦の仕方も習った。一度吐いたがなんとかまともに扱えるようになった。練習には父さんの持っていたブレードバーニア搭載型の機体を使ったのだが、これが何故か名前も何も思い出せない。

一応学校にも行った。意外に友達もそれなりに出来た。

相変わらず進斗は周りよりも大人びていた。一方のリヨウは何故か僕らの中では勉強が一番出来た。

この頃だっただろうか。父さんは進斗とリヨウにもヴァレットの整備や製作を教えようとしたのは。

リヨウは僕ほど熱心ではなかったが、最低限のこと学んでいたようだった。

進斗はというと、あまり乗り気ではなかったらしく、丁重に父さんの誘いを断っていた。

（じゃあ進斗はコンピューターの使い方でも勉強しようか）

後で母さんが進斗にそう言った時、彼が心なしに嬉しそうに見えた。気がした。何しろ無表情な子供だったから。

それから数年経った、あれは今から三年前の冬頃だった。

時計の針が文字盤の左上を指す、昼ごろのことだ。ここから先は断片的にしか覚えていない。

緊迫した顔で僕らを連れていく母さん。

（ねえ、どうしたの？）

無言。

（母さん、何があったんだよ）

（いいから早く）

たどり着いた先は整備場。さらに奥へ僕らを連れていく母さん。

（ここでじっとしてて）

気がついたら僕らは狭い民生機のコックピットの中だった。

それからいくつもの音が聞こえた。何かのひしゃげる音、はじける音、誰かの悲鳴。そして――

――自分の心音。

周りが静けさに包まれた。僕らは外に出る。父さんのヴァレット

がないことにリョウが気付いたが、そんなことは後で良かった。

一心不乱に走り、片っぱしから三人でドアを開けた。家があちこち傷ついていることなど気にも留めなかった。

そして、台所の当辺りだったろうか。

赤く染まつた母さんの死体を見つけたのは。

それからもう――

僕は昨日島原さんに話したことを思い出していた。島原さんは僕らの生い立ちを聞くと、苦い顔をしてその後しばらく押し黙り何かを言おうとしていたが、結局は何も言わずにまた夕食にがつき始めた。

思い直してみれば、父さんは僕らと母さんを見捨てて一人で逃げたのだろ。まあそんなことは今考えてももうどうしようもない。

目を開けるとカーテンの隙間から差し込む朝日の光が眩しい。しかしそれもうでもいい。何しろ…

「おい、起きろ。早く起きろって！」

起きて早々髪を散々引っ張られているのだから…。

「ああー痛い。何も髪の毛引っ張ることないだろ」

「急ぎの用だからな」

そうそっけなく言う彼女がドアを開けた。

中では欠伸をする進斗、居候し始めた島原さん…ともう一人、見知らぬ子供が椅子に腰かけていた。

「ん、ああ、おはよ柏」

進斗が気だるそうに挨拶する。

「おはよう。で、この子は？」

僕は島原さんと会話している子供に目を向けた。するとその子供もこちらに顔を向けた。長めの髪の下から大きな目が見え隠れする。一見女の子に見えるがよく見ると男の子らしい。

「姉ちゃん、この人？」

「ああ、でも姉ちゃんはやめてくれ。名前で頼むよ」

以外とリヨウは子供に優しいが、譲れないところはしっかり主張する。

「え？僕がどうかしたの？」

何も知らずに厄介事に巻き込まれるのだけは御免なので一応話は聞く。

「まあ座りなさい」

島原さんに勧められるがまま僕は椅子に座り、リヨウの話に耳を傾けた。

その男の子、「浅間^{あさま} 久志^{ひさし}」君は、リヨウの話では早朝6時ごろに突然ここを訪ねてきたらしい。既に起きていたリヨウが玄関に出ると、

（昨日のお兄ちゃんは？）

玄関先で突然そう聞いたのでリヨウは話を聞いてやることにしたという。

（姉ちゃん男勝りなのに胸おつきいね）

（……………いいから早く）

（今のはちょっとふざけただけだからそんなに怒らないでよ）

余計な会話の後、久志君はリヨウにゆっくりと事情を話し始めた。彼の家は、両親、兄、姉と自分の5人家族で、この不況でも珍しいとりわけ貧乏な家庭らしい。もともと満足とは言いにくい生活を送っていたが、一家の大黒柱である父親が仕事をクビになり、最初はなんとか家族を養おうとしたものの、次第に絶望して家に引き籠り、周りには全くと言っていいほど無関心になってしまった。それからは家計が油に燃え広がる炎の如く悪化。母親が水商売までしたものの、借家の家賃が上がったせいで、それだけでは足りなくなり、仕方なく金融会社から生活費を借りた。が、しかし。後になってそこに騙され、高額の利子をつけられていたことを知るも、その時に

はもう遅かった。借金は大きく膨れ上がり、不足分の取り立てに毎日……まあヤクザ屋さんらしき人たちが家に押しかけてきて、最初は居留守や母親が話し合ってたなんとか追い返せた。しかし次第に嫌がらせがエスカレートし、拳銃の果てにはヴァレットを持ち出して脅しをかけ始め、仕方なく相手の言われるがままに金を払うが、そんなことをしているうちに当然生活費も尽き、母親も限界に達した。そんなとき、何かいい方法がないかと外を出歩いていた彼が見たのが、墜落したヴァレットで軍用機を撃墜する僕だった。僕の戦いぶりに感心し、先述の強引な取り立てを僕にやめさせてもらおうとここに来た……。

「ってなんて子供だよ……僕らの顔を覚えてるところか居場所までつきとめるとは……」

僕は久志君にある種の恐怖を感じた。

「通りかかった車に乗せてもらってたあの残骸背負ったヴァレットを追いかけて、後は近くに住んでる人に話を聞いた。みんないい人で助かったよ」

彼が僕に淡々と語る。

「ところでカーチャンが水商売をしてるってというのはどうやって――」

「そんなことをわざわざ聞くな」

興味津津の進斗の言葉をリョウがぴしゃりと遮る。

「うむ、賢い子だな」

笑顔で感心する島原さん。まあ異様に行動力があるのは僕も認めるが。

それは置いておいて、リョウが僕を見て言った。

「というわけで柏、助けに行くぞ」

「はあ!？」

「何を驚いとる。当然じゃろう」

振り返った僕をいかかわしく見つめる島原さん。

「爺さん、あんたも同感か」

「あたりまえじゃ。やつぱりリヨウちゃんはわしの思ったとおり優しい子だ」

「ちゃん付けやめろ。しかしオレはあんたを見直したよ」

シンパシーを感じる二人を一瞥し、進斗が僕に言う。

「賛成2人、反対1人、保留1人で助けることは決定か」

「保留？」

「それは俺」

「…」

進斗のいい加減さに呆れる僕に、久志君が目を輝かせながら口を開いた。

「やった！頑張つてね、兄ちゃん！」

もしも彼が可愛げのある幼女なら…いや、そんなことはない。

「そう言われても困るんだ…僕は忙しいから…」

「昨日の輸送以外に仕事来てなかったよな？」

リヨウが鋭くつつこんできた。

「そ、そう言われても話を聞く限り報酬もらえそうにないし…それでも助ける義理は…」

「馬鹿者。何を言う。まず自分を頼ってくれる隣人を助けることから、世界平和が現実のものとなっていくというのに…」

深い話をされても困るんですが…島原さん…

一通り話してから島原さんは静かに言った。

「ま、どうしても嫌なら仕方がないだろう」

「爺さん、何言ってるんだ！？助けに行かないのか？」

全員の目が島原さんに向けられ、彼は自信たっぷり口を開いた。
「安心してくれ、わしが『大和』に乗る！」

「え？爺ちゃんが？」

まず、当の依頼者が全く安心していない時点でかなり不安だ。

外では風が吹き、機体の外装に当たって乾いた音を立てている。

外はかなり寒いのだろう。

島原さんの肩越しに見えるモニターの外の風景はどこまでも灰色の住宅街だった。僕は本当はこんな所に来たくなかったのだが、一応仕事でもある。何しろ依頼人・久志君の話を聞けば、昨日届け損ねた荷物の輸送先は自宅の近くだと言うのだ。それならヤクザ屋さん退治は輸送のついでにやればいい。

仕事となれば話は別だ。報酬は僕ら義兄妹の生活費なので、僕だけ行かないわけにはいかない。

「えーと、連中が来るのは何時頃だったかの？」

『確か9時頃から10時頃だよ。爺ちゃん』

通信機から久志君の明るい声が聞こえる。

『今8時54分。もうすぐ来る。その時は頼んだぞ、爺さん』

続いてリヨウの声が聞こえた。

「分かつとる。1分でけりをつけてくれるわ」

口元を綻ばせた島原さんの顔には自信のほどが伺える。僕はどうしても腑に落ちないことがあるので彼に聞いてみることにした。

「島原さん、なんで僕と一緒に？」

「発作がまた出たら困るだろう」

「薬は？」

「あれはたまに効かん」

「…」

一番気が進まなかったのになんで僕が保険に…それはともかく例の輩はもうすぐ現れるはずだ。目を離さない方がいい。

他の建物よりやや高いマンションの陰から再度久志君の自宅を監視する。壁の劣化が激しいのを除けばごく一般的な借家だ。

『来たかな』

進斗が唐突に言った。レーダーを見ると確かに接近中の二機のヴァレットが存在する。

『あれか…』

リヨウが空に見える黒い影に気がついた。

二機のヴァレットが道路に乱暴に降りた、というより飛び降りたと言った方がいいか。

「よし、じゃあ島原さん。まずは牽制射撃——」

そこまで言ったところで僕は重大なことに気がついた。

機体が高速移動し、敵が眼前に近づきつつあった。

「その連中、待たんか！」

外部スピーカーで大声を響かせる島原さんに、二機のヴァレットが向き直る。

やや華奢な胴体に乗った頭部には三つ目の光学センサー。手足はやや太い。確かあれは『TID34型 ベイオネット』だ。今まで何度も見たことがある。比較的高価な日本産民生機で、主に自警団や企業が運用して——

『なんだデメエ？』

僕の心の声を遮るように相手が外部スピーカーで怒鳴った。

「ワシは元日本自衛隊一等空佐、島原靖也だ！」

そんな大声でわざわざ名乗らなくても……。

『爺さん、下がってな。怪我する前に』

『言えてる言えてる。元とか……ハハハハハハッ』

相手の機体が胸を反らして嘲笑うような動作を見せた。

「調子に乗りおって……よし、行くぞ！」

「え？あ？は……ちよっ——」

僕の気も知らずに島原さん操るエイナは相手に向かって猪突猛進する。

『なっ、なんだ？』

相手が肩をこわばらせた瞬間、エイナは拳を機体の顔面に叩きつけた。

バランスを崩した機体が道路に倒れて砂ぼこりを上げた。

「ちよちよちよちよ、何やってるんですか！？」

「まあ見とれ見とれ」

進斗達もこの光景を共有していたようだった。

『おいおい、爺さん』

『爺さん突然何を！？』

『凄い凄い。爺ちゃん頑張れ！』

『見とれ見とれ』

これぞ馬耳東風と言っているのであろう。

『てめえ、何しやがる！』

道路で寝ている相棒を見て、もう片方が声を荒げた。

しかし、エイナが突き立てた中指で相手を招くような動作をとった。

「何挑発してるんですか！」

「ふん、調子に乗つとる若造には丁度いいわい」

「つてま、前、前！敵機が！」

「む」

ベイオネットの複眼がすでに目と鼻の先まで迫っていた。このままじゃ——避ける——

僕が目こそむけた瞬間時、金属のぶつかり合い、ひしゃげる音が聞こえた。

エイナの膝蹴りで腹の駆動系を損傷した敵機がよろよろと道路に手をついた。

『な……』

リヨウの感嘆……というより驚きの声が通信機から漏れる。

「小癪な！」

10数メートルほど先に、体勢を立て直して距離を取ったもう一機がヴァレット用ハンドガンを構えるのが見えた。が、エイナがブレードバーニアを起動する方が引き金を引くのも早かった。木霊する銃声は何故かスローモーションのように聞こえ、相手の発砲した弾丸がエイナの装甲をかすめた。気が付くと機体が宙に浮いていた。

エイナはそのまま相手のハンドガンを空中から叩き落とした。着地と同時にエイナはしゃがみ、隙を見せた相手の足首を掴んだ。

次の瞬間、バキリ、と何処か不快な音が響いた。ふと見ると相手の右足は本来想定されていない方向にエイナによってへし折られていた。

『柏』

「何？」

『……………えーと、なんて言うか…言葉に、出来ない』

「僕も」

リヨウの前では進斗と久志君が素直に感動しているようだった。

しかし、本当にこの人は凄い。戦闘技能そのものはまだまだ素人の僕の目から見ても確かに凄い。でも僕はこの人の凄さがそれだけではないと思った。

なにしろ、平和な住宅街が傷一つ無く目の前に広がっているのだから。

「もとはと言えばうちが悪いのに…それにこの子が迷惑かけたみたいで本当にすいません」

「いやいや、調子に乗っとるあの若造どもがいかなのじゃ。それにしても若いのお。今歳は幾つ？」

島原さんの質問に、浅間夫人は綺麗な顔で苦笑しながら「今年で…33です」と答えていた。「へえ、そうは見えんけどなあ…」と島原さんが顔を若干ご婦人に近づける。

全く元気で人懐っこい爺さんだ…と思いつつも、こうして昼食を御馳走して貰って、今日の昼食代を浮かせてもらったのは全部彼のお陰なのだということを僕は思いだした。それに貯金や年金を僕らのためにも使ってくれることを承諾してくれたのだ。一角の敬意と感謝を表さねばならない。

「ところで離婚についてはかんがえとらんのか？和子ちゃん。なんならわしが面倒を見てやらんこともないが」

「え…あ、はあ…」

次第に調子に乗ってきた島原さんと彼に言い寄られて引き気味の

浅間婦人こと和子ちゃんは、まるで血統書付の高級犬にガラス越しに血眼で求愛する野良犬のようで、見ていてかなり和む。これも一応利益だ。

そんなことを考えながら、僕は卵焼きを丁寧に口に運んだ。懐かしい味だ。いや、もう少し塩加減は強かったか…。

貧しいのにの関わらず、感謝の心で料理を作った本人の正面で嫌な顔してしまつたら、面倒なことになりかねない。だから僕はその辺で味を詮索するのをやめた。

それより早く聞いておかなければならないことがある。

「あの…」

浅間夫人がこちらを向いた。会話を僕に遮られた島原さんが不機嫌そうに口を開こうとしたのは無視した。

「あら、何？うちのことは心配しないでいいのよ。また頑張つて働けばいいし。今日は娘が外で食べてくるって言つてたから…それにもう一人は酒以外は口にしないからもと余つてたのよ」

「あ、いえ。そうじゃなくてこの辺で『佐原 玄^{さわら げん}』という人を知りませんか？その人に荷物を届けなきゃいけないんですけど…」

僕はそう言つて、手元の箱をそつと撫でた。紛失したら困る。

依頼人からのメールには、「重要な物品につき、仮に遅れても出来るだけ確実に輸送願いたい」と書かれていたし、依頼人本人から荷物を受け取る時も念を押された。まあ住所は渡されていたのだが、念のために近所の人に確認しておいたほうがいいと思つていたのだ。その機会を与えくれた点でも島原さんに感謝しなければならぬ。

一方、浅間夫人は大きめで二重まぶたの目を見開いた。

「あら、それつてお義父さんじゃない」

「え？お父さん？」

「ええ、あの…飲んだくれ亭主のお父さんよ。頑固で偏屈な所があるんだけど顔が広くて信頼のあるとってもいい人。でもなんでお父さんはいい人なのに息子はあんな飲んだくれのフヌケなのかしら…！」

次第に淺間夫人の穏やかな表情が変化し始めた。微小から無表情、無表情からしかめっ面、目を伏せると、こめかみにおぞましい青筋が浮き上がってきた。ガラスの置物のようにしなやかだった白い手も、今では地獄の万力の如く強く握りしめられている。

その上、何かブツブツと低い声で独り言を言い始めた。断片的に聞き取れた内容から察するに、亭主への悪態のようだ…。

“駄目な亭主に黙ってただ付いていく、一途な妻”というのは所詮ドラマの中の話だった。そして、亭主への怒りと憎悪に燃える本物は洒落にならないくらい見ていて恐怖を覚えることを僕は今実感している。

なんと言おうか、全身から出ている府の感情がが大気を伝わってくるようで本当に恐ろしい。

右側のリヨウに目くばせする。脂汗を滲ませ、見開いた目で僕に警告を発している。

左側の進斗の様子も見る。もともと色白の顔を真っ青に染め、目を細めて恐怖と戦っている。普段は多少のことでは動じないはずの進斗が怖がるのは経験上、危険信号だ。

延々と亭主を呪うご婦人の怒りを一刻も早く鎮めないと非常に危険な気がするが、今話しかけようものなら、機嫌が直らないどころか逆に悪化し、目の前の箸で相手の両眼ををえぐり取りそんな勢いだ。

受取人の住所をまだメモしていないのに、目を取られるわけにはいかない。

一方の久志君とその兄は、もう母の怒り…と言うより底のない憎悪には慣れっこなのか全く問題無く食事をしている。………危険性を十分理解しているためか、止める様子も全く無い。

久志君の兄、「淺間 哲司」君が僕らを見て、小声で「危ないですから…」と囁き、首を左右に振った。

超強力な爆弾を抱えたようなこの状況を、どう処理すればいいか三人でそれぞれ考えていた時だった。

「あれが？」

「はい」

数メートル歩いてその「アトリエ」に近づいた。島原さんとリョウも言葉を発した。

「本当か？」

「いや、違うだろ」

そして僕は絶句する。

その目の前にあったのは――

――高さ4メートル程度の薄汚いトタン張りの直方体だった。

「ま、まあ中に……」

哲司君がおもむろにそれから突き出したドアノブに手をかけた。実はドアがあつたらしい。気がつかなかった。

しかし、その微妙な驚きは大きな畏怖と不安によってかき消されてしまい、もはや微塵も感じなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6521f/>

勇気と絶望を胸にS.T.T.S.

2010年10月14日03時42分発行